

2025.4.13.

「成し遂げられた」

旧約 詩編 69章 14～22節

新約 ヨハネによる福音書 19章28～30節

1. しゅろの主日

来週の主の日、私共はイースターを迎えます。今日はイースターの一週間前、棕櫚の主日と呼ばれます。この呼び方は、エルサレムに入られるイエス様を迎える人たちの光景から来てています。ヨハネによる福音書12章13節には、イエス様がエルサレムに入られた時、人々は「ナツメヤシの枝をもって迎えに出た」とあります。この言葉が口語訳聖書では「しゅろの枝を手にとり、迎えに出ていった。」となっていました。この「しゅろの枝を手に取り」という所から「棕櫚の主日」と呼ばれるようになりました。人々はどうして「しゅろの枝を手に」イエス様を迎えたのか。それは、人々はよく分からぬなりに、イエス様を救い主として受け入れ、期待していたからです。良くは分かっていませんでしたけれど、期待はしていたわけです。ですから、人々はイエス様のエルサレム入城を歓迎し、こう口々に叫びました。「ホサナ、主の名によって来られる方に、祝福があるように。イスラエルの王に。」(ヨハネ12:13)「ホサナ」というのは元々は「どうか、救ってください」という意味ですが、ここでは日本語の「万歳！！」に似た感じで呼ばれていると思います。いずれにしても、人々はイエス様を救い主、メシアとして迎えたわけです。

このイエス様がエルサレムに入られたことを、キリスト教会では「エルサレム入城」と言います。場所に入る「入場」ではありません。城に入る「入城」です。誰かがお城に入る時に、その人が入城したと言われるのは、そのお城の主人だけです。一般の人が城に入っても、入城したとは言いません。つまり、イエス様がエルサレムの主人、エルサレムの王としてエルサレムに入られた。それがこの棕櫚の主日に起きたことでした。

2. 受難週・受難日

さて、このイエス様がエルサレムに入城した日から受難週に入ります。ヨハネによる福音書は、この受難週の一週間の出来事の記述に、福音書全体の2／5を費やしています。最後の一週間に40%を費やすというのは、偉人の生涯を描く伝記等ではあり得ないでしょう。福音書は、明らかにこの一週間を特別な一週間として扱っています。もっと言えば、この一週間のことを記すために福音書は記された。そう言っても良いでしょう。では、この一週間には何があったのか。そ

れは言うまでも無く、イエス様の十字架と復活です。週報にありますように、今週の木曜日は洗足も木曜日と言います。イエス様が弟子達の足を洗われたことを覚えて付けられました。「聖書の学びと祈りの会」を行います。そして、金曜日は受難日です。イエス様が十字架にお架かりになられた日です。この日、私共はイエス様の御受難を覚えて、聖餐に与ります。一人でも多くの人がイエス様の御受難を覚え、祈りを合わせ、そしてイエス様が御復活された喜びのイースターを迎えることを願っています。 今、木曜日は洗足木曜日、金曜日は受難日と申し上げましたけれど、これは現在の私共の一日の数え方、夜中の12時を起点に一日を考える数え方に従った言い方です。聖書の一日の数え方は、日没から一日が始まります。そして、次の日の日没までが一日となります。ですから、ヨハネによる福音書の記述によれば、13章の洗足の場面から、今朝与えられておりましたイエス様が十字架にお架かりになった場面、更にイエス様の遺体が墓に納められた所まで、すべてが一日の出来事になります。皆さんのがイエス様の御受難の歩みに於いて思い起こされる場面、最後の晚餐、ゲツセマネの園の祈り、ユダの裏切り、ペトロの三度否み、イエス様の裁判、兵士達にイエス様が嘲弄される場面、イエス様が十字架を背負い歩かれる場面、そして十字架にかけられ息を引き取られる場面。そして葬られる場面。それらは、すべて一日の出来事として聖書は記しています。つまり、ヨハネによる福音書ならば13章から19章まで、全体で21章の内の7章、全体の1／3がイエス様が十字架にお架かりなられた一日の出来事を記しているということです。いかにこの一日が重大な一日と受け止められていたかが分かるかと思います。

3. 渴く

さて、今朝与えられている御言葉は、イエス様は十字架にかけられ息を引き取られた場面を記しています。そして、イエス様は十字架の上で「渴く」と告げられたというのです。この言葉は、イエス様の十字架の苦しみを示していると思います。イエス様は午前9時頃に十字架にかけられ、午後3時頃に息を引き取ったとマルコによる福音書は記しています。イエス様は十字架にかけられてすぐに死んだのではありません。鞭打たれた背中から、そして釘を打たれた両手と両足から出血が続きました。そして、イエス様は6時間及び痛みと苦しみの果てに、息を引き取られました。死因は出血性ショック死、或いは出血による心不全、或いは十字架の姿勢による肺の圧迫による窒息死、等々が考えられます。しかし大切なことは、イエス様は本当の死の苦しみを味わったということです。最後の晚餐の後、飲まず食わずだったでしょう。そして6時間も十字架にかけられたままなのですから、この時の喉の渴きはとても激しいものだったに違いありません。私共が味わったことの無い激しい渴きだったことでしょう。私共は、誰も死の苦しみを味わったこ

とがありません。生きているのですから、当たり前のことです。

私は今まで 100 人近くの方の葬式をしてきました。多くの場合、牧師はその人が亡くなつてからその人の所に駆けつけるのではありません。その点で、お坊さんとは全く違います。お坊さんが病室に行こうとしますと「まだ早い」と返されてしまうと、親しいお坊さんから聞いたことがあります。牧師は、具合が悪いと連絡をうければ、その人の病室に行きます。一度ではありません。何度も行って枕元で祈ります。そして、亡くなりそうだと連絡を受ければ、家族の方とその方の最後の時を一緒に過ごします。それはとてもとても辛い時です。家族の方にかける言葉などありません。しかし、牧師として私はただ一つのことを信じて、その場に居続けます。それは、この方の苦しみをイエス様は知っているということです。そして、イエス様は今もこの方と共におられる。その事を信じてそこに居続けます。私はその方の痛みも苦しみも分かりません。しかし、イエス様は知っています。そして、そのイエス様が今、この方の傍らにおられる。そしてこの人に告げる。「私はあなたの苦しみを知っている。私も味わった。痛かろう。苦しかろう。その痛みを、その苦しみを私は知っている。大丈夫。私はここにいる。あなたは一人ではない。あなたの死は私の死。あなたは私と一つ。」そう語りかけて、イエス様がこの人の魂をしっかりと捕らえてくださっている。そのことを信じ、私は多くの人の死に立ち会つてきました。イエス様は私共の死の苦しみを知っておられる。だから、私共はたとえ死にゆく時でも、イエス様は私共と共にいてくださることを信じることが出来るし、信じて良いのです。このことをヘブライ人の手紙は 4:15 で「**この大祭司（イエス様）は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかつたが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。**」と告げている通りです。

4. 酸いぶどう酒

イエス様はこの時、差し出された「酸いぶどう酒」を受け取りました。「酸いぶどう酒」というのは、古くなつて酸っぱくなつたぶどう酒です。お酒は放っておけば酸っぱくなり、やがて酔になります。どうして十字架に架けられた人に酸いぶどう酒を差し出したのか。それは、痛みと疲労と出血により気が遠くなる人に、気付けように差し出されました。残酷な話です。気を失わせないで、最後まで痛みを味わせようとしたわけです。イエス様はそれを受け取りました。それは、最後まで死の苦しみを味わうためでした。どんな死の苦しみの中にある人にも、その痛みと苦しみを知っている者として、最後まで私共と共に歩むためです。

5. 御心の実現

イエス様が「渴く」と言われたのは、イエス様は「すべてのことが今や成し遂げられたのを知」ったからでした。「すべてのことが成し遂げられた」とは、どういう意味でしょうか。それは、神様の救いのご計画、つまり私共罪人の一切の罪を赦し、神様との親しい交わりを回復するというみ心です。それが全て成し遂げられたのを知った。そして「渴く」と言わされた。この「渴く」という言葉は、イエス様の肉体的な状態を言っているだけではなくて、「すべてのことが成し遂げられたことを知った」ことを示す言葉でもあったということです。それは、詩篇の 22 編の 16 節に「**口は渴いて素焼きのかけらとなり／舌は上顎にはり付く。**」という言葉あり、「渴く」と告げられたイエス様は、まさに詩篇 22 編に告げられていた預言が成就したということを、この「渴く」という一言で示されたということです。詩篇 22 編というのは、「**わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか。**」で始まる有名な詩篇です。この詩篇は代表的なキリストの十字架の預言です。今、この詩篇について丁寧に見ていくとまはりませんけれど、ざっと見ても、冒頭の「**わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか。**」は、マタイによる福音書とマルコによる福音書において記されている、イエス様の十字架上での言葉です。又、8. 9 節の「**わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い／唇を突き出し、頭を振る。『主に頼んで救ってもらうがよい。主が愛しておられるなら／助けてくださるだろう。』**」は、イエス様が十字架の上で、人々から馬鹿にされ、嘲られた場面そのものです。更に 18 節「**骨が数えられる程になったわたしのからだを／彼らはさらしものにして眺め**」も十字架上のイエス様の姿ですし、19 節の「**わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く。**」は、実際にイエス様が十字架に掛けられている時に、その下では、イエス様の服が兵隊達がくじ引きで分け合っていました。そして、イエス様は「渴く」と告げられた。それは、詩篇の 22 編で預言されていた十字架による救いの御心が成就したことをイエス様は確信し、そのことを「渴く」という一言で示されたということです。

6. 成し遂げられた

そして、十字架によって神様の救いの御心が成就したことを決定的に示されたのが、イエス様が息を引き取る直前に告げられた「**成し遂げられた**」という言葉でした。これは直訳すれば「終わった」という言葉です。しかし、この「終わった」というのは、目的、目標を達成して終わったという言葉です。まだ中途半端だけれども、もう時間が来たから終わりにしよう。「終わった、終わった」と言うような「終わった」ではありません。為すべきことは何一つ残さずに終わった。

もうやるべきことは何も無い。そういう「終わった」です。ですから口語訳では「すべてが終わった」と訳していました。この「成し遂げられた」という言葉は、「完了した」と訳しても良いでしょう。イエス様は、自分はこの十字架の上でまさに死ぬけれど、それによって「神様の救いのご計画」「救いの御心」「救いの御業」がこれで完了した、完成した。そう告げて、息を引き取られました。

では、イエス様の十字架の死によって成し遂げられた神様の救いのご計画とは、どのようなものだったのでしょうか。それは、イエス様が天から降り、おとめマリアから生まれた時から始まった、神様の救いのご計画です。天地が造られる前から父なる神と一つであられ、父なる神様が最も愛する神の独り子であるキリストを、人間イエスとしてこの世に遣わされ、完全に清い罪なきこのお方を、罪人として裁く。そのことによって、私共の一切の罪の裁きをこの方に担わせ、そのことによって私共を赦し、神の子とするという、とんでもない救いのご計画です。この救いのご計画が成し遂げられた、完了した。

使徒パウロは、この出来事についてこう告げました。ローマ5：6－8 「**5:6 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。5:7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。5:8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」 この神様の愛は、あり得ない愛です。どうしてキリストの教会は、十字架をのシンボルとしているのか。それは、この十字架に神様の愛があり、この愛によって、私共は救われたからです。一切の罪を赦され、神の子とされ、永遠の命に生きる者としていただいたからです。

しかし、このイエス様の十字架によって成し遂げられた私共の救いは、イエス様の御降誕というクリスマスから始まったわけではありません。もっとずっとずっと前から、神様はこのご計画をされ、遂に時満ちて、イエス様の誕生による最後の救いの御業が始まりました。そのことを知っていた天使たちは天の大軍となって、イエス様がお生まれになった時、遂に神様の救いのプログラムが発動したことを知り、「天には栄光、地には平和」と歌ったのです。

7. 既に成し遂げられている

神様の救いの御業は、イエス様の十字架によって既に為し遂げられました。私共がそれに何か付け加える必要はありません。私共が救われるためには、もっと良い人にならなければ、もっと優しい人にならなければ、もっと正しい人にならなければ、そんなことは全くありません。そも

そもそも、そのような良き人になれないから、それでは誰も救われないから、神様はイエス様を与えてくださり、私共の為に、私共に代わって十字架にお架けになって、救いの道を開いてくださったわけです。ですから、イエス様の十字架によって自分の罪が赦された、そのことをただ感謝をもって受け入れるだけで良い。ただそれだけで、神の子としていただけます。神様を「父よ」と呼ぶことが出来ます。永遠の命をいただけます。こう申しますと、話がうますぎるではないかと思う人がいます。そうなのです。話がうますぎるのです。善い人になって、良い事をするなら救われる。それが当然ではないか、そう考える人は少なくありません。しかし、それは福音ではありませんし、キリスト教でもありません。何故なら、神様は愛のお方だからです。神様の愛は、ギブ アンド テイクではありません。ギブ アンド テイクは人間の世界、この世の秩序です。しかし、神様は違います。神様はギブ アンド ギブです。しかも徹底的にです。何故なら、神様の愛は徹底的だからです。この徹底した愛を、人は想像することさえ出来ません。ですから、うまい話だとまともに受け取ろうとしない。しかし、それは何ともったいないことでしょう。

8. 神であられる故に

しかし、どうしてイエス様の十字架が、二千年も経った地球の裏側の私共の救いとなるのでしょうか。それは、イエス様が神様だからです。人間は有限ですから、どんなに力持ちでも持ち上げることの出来る重さに限界があります。限界があるから、ウェイトリフティングという競技も成立するわけです。しかし、神様は無限です。ですから、イエス様の十字架は無限に人の罪の身代わりとなることが出来るわけです。こう言っても良いでしょう。イエス様が十字架の上で罪人として裁かれることによって、低きにの極みに降られることによって、私共は神の子という高みへと挙げられました。これは、シーソーのような関係です。どんなに多くの人の罪であってもそれは有限ですから、イエス様の無限に重い十字架によって持ち上げられてしまうということです。イエス様が神様でなかったのなら、こうはなりません。つまり、私共は決して救われないことになってしまいます。

神様と一つであられた神の御子が、私のために、私を救うために、十字架にお架かりになりました。実に、イエス様の十字架は、私の為でした。今朝、イエス様は私共一人一人に向かって「あなたの救いは成し遂げられた」そう告げてくださっています。このイエス様の語りかけを、感謝と喜びをもってアーメンと言って受け入れたいと思います。

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、イエス様が私共の為に、私共に代わって十字架にお架かりなってくださり、
私共の一切の罪の裁きを担ってくださったことを改めて心に刻むことを許され、感謝いたします。
ただ信じるだけで、ただ受け入れるだけで、一切の罪を赦していただき、神様の子としていただき、
救いの恵みに与れますことを、ただただ感謝し、御名を讃美賛えます。どうか、その様な救
いの恵みの中に私共がしっかりと留まり続け、御国への歩みを健やかに為していきますよう、心か
ら祈り願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン